

滋賀の文化情報誌
デュエット

Duet

2014 秋 vol.114

特集

近江の自然災害

—地震と水害の歴史—

新撰 淡海木間撰 58 佐川美術館所蔵 国宝・梵鐘

INFORMATION STATION 催し案内 2014秋

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内





特集

近江の自然災害

—地震と水害の歴史—

企画展示期間 10月4日(土)～11月24日(月)

一般に自然災害が少ない都道府県の一つに思われることが多い滋賀県ですが、歴史をさかのぼると数々の地震や洪水などによって、大きな被害を経験してきました。自然の脅威と向き合ってきた地域の記録を紹介する企画展が野洲市歴史民俗博物館で開催中です。

担当学芸員の齊藤慶一さんに、同展の見どころなどをお聞きました。

野洲市歴史民俗博物館（銅鐸博物館）

住 所 野洲市辻町57-1

連絡先 TEL 077 (587) 4410 FAX 077 (587) 4413

観 覧 料 大人200円、高大学生150円、小中学生100円
※野洲市民は入館無料
※「関西文化の日」11月15日・16日は全来館者無料

アクセス JR 野洲駅南口から近江鉄道バス「希望が丘西ゲート」方面行きで「銅鐸博物館前」下車／名神高速道路「竜王 IC」または「栗東 IC」から国道8号経由約15分



↑昭和28年の野洲川大洪水による被害（すべて辻川信義氏提供）
[左上] 撮影地：野洲市井口／[右上] 野洲川北流堤防の決壊現場
[左下] 撮影地：野洲市井口／[右下] 撮影地：野洲市須原

↓貴重な絵図や写真が並ぶ展示のようす



取材／編集部 写真／辻村耕司

人々は、自然の脅威と常に向き合わ ないといけけない生活をしていました。

野洲市歴史民俗博物館学芸員

齊藤慶一さん

— 今年には土砂崩れなど自然災害が再び注目された年でもあり、今回取材をお願いいたしました。先にご経歴をお聞きました。が、齊藤さんは、この館の学芸員さんの中では一番お若いのでは？

はい。ですから、企画展を担当するのはまだ2回目です。去年、県内最大の河川である野洲川をテーマにした「野洲川の歴史と文化」という企画展を初めて担当させてもらいました。野洲川の下流域にしばってですが、野洲川が北流と南流の2川に分かれていた時代のことを紹介しました。その中の一つのコーナーで水害を取り上げたことが、今回の企画展につながっています。

— 野洲川が流れる野洲市は、水害の常襲地域でもあったわけですね。

戦後で一番大きかったのは昭和28年（1953）の洪水ですが、計算してみると10年に1回の割合で野洲川は氾濫していました。たぶん地元の方にしたら、洪水というのは日常茶飯事とまでは言いませんが、誰もが生きているうちに何度かは経験するものだったのだと思います。

去年の企画展のあと、昭和28年の水害をもう少し詳しく調べる必要を感じたのと、自然というものをもう一度見直すことが必要なのではないかと考えたのが今回の企画展の始まりですね。

— 今回はタイトルも「近江の自然災害」となざっており、野洲市の範囲だけでなく、滋賀県全域にまで範囲を広げておられますね。

はい。ただ、すべての災害をあつかうことは困難ですので、代表的な地震と水害にしばっています。自然現象、地震や大雨などによる被害を経験するのが普通のなかで人々が暮らしてきて、その地域が発展してきているということなどを、何か語れないかと考えました。

— 歴史というと、何年に誰それが何をしたというように人間主体で語られるものですが、そうではない歴史の側面ですね。

まず自然があつて、そのなかで人間の社会が築かれていると考えたときに、自然の脅威に対して人がどう向き合ってきたか。ちよつと堅苦しい言い方ですが。

その1 近江を襲った地震の痕跡と記録

— では、展示構成を踏まえて、順番にご説明いただけますか。

まず、第一章は「近江における地震の痕跡」と見出しをつけました。地震研究者の寒川旭さんが提唱しておられる「地震考古学」という学問分野があるのですが、その始まりは昭和61年（1986）に寒川さんが滋賀県高島市の北仰西海道遺跡という縄文時代の遺跡で液状化の痕跡を確認なさったことからです。つまり、滋賀県は「地震考古学」発祥の地なんです。その後、県内の発掘調査で、主に琵琶湖周辺の26遺跡、28ヶ所から地震の痕跡が見つかっていきます。

その例として、野洲市八夫の八夫遺跡で確認された弥生時代中期に砂礫層が液状化



プロフィール

さいとう・けいいち／1985年、富山県生まれ。佛教大学大学院文学研究科日本史学専攻修了。滋賀県立琵琶湖博物館、愛荘町立秦荘図書館の嘱託職員を経て、2012年より野洲市歴史民俗博物館に勤務。趣味は俳句。

して、礫が噴出したことを示す地層①を紹介しています。

よく地震後のニュース番組などで「液化」という言葉を聞きますが、砂の層で起こりやすい現象です。礫と呼ばれる大きな砂利などの層が噴出しての跡というのは珍しいものです。大規模な地震がこの地域にもあったという証拠で、マグニチュード7・5前後だと推定されています。

■堅穴住居で暮らしていた時代ですね。

はい、そうです。この噴礫層から、弥生時代の人々が大規模な地震に遭遇したことがうかがえます。

次に紹介するのは平成18年（2006）に長浜市西浅井町塩津浜で発見された塩津港遺跡②です。葛籠尾崎の東側の入り江にあった11世紀の港跡と神社跡で、輸入陶器などのほか、国内最古をふくむ多数の起請札木簡が出土して話題となりました。

今回の展示で注目したいのは、この港と神社が、地震で琵琶湖に発生した津波によって被害にあったらしいと想定されていることです。神社の建築物の柱の多くが北

に傾いていること、液化にともなう噴砂や地割れが確認されること、本来、大切に隠されている神像が出土したことなどから、何かしら、突発的な災害があったのだらうと考えられます。

——襲ってきた津波で押し流され、地中に埋まってしまったわけですか。

同時代の中山忠親という公家の日記『山槐記』などを見ると、元暦2年（1185）に起きた地震で琵琶湖の水が陸地に流れ込んだという記述もあり、津波が発生した可能性があるとされています。その日記によると、田が3町（約300m）ほど裂けた所もあったそうです。

——地震の発生によって、琵琶湖北端の塩津が被害を受けたと考えられるわけですね。

まったくだけでなく、安曇川がせき止められ天然のダムが形成されたために、坊村が水没しました。500人以上の人が亡くなられたと伝えられています。

——南北に通る鯖街道の東側の斜面が崩れ



↑八夫遺跡 発掘現場の噴礫断面
（野洲市教育委員会保管）
↓塩津港遺跡神社遺構
（滋賀県教育委員会提供）



たのですね。この時でしたか、朽木氏の偉い人が死んだというのは。

そうですね。その地震ですね。お殿様が圧死したとされています。もう一つ、この寛文の大地震の被害を記録したものとして有名なのが膳所城の絵図です。地震発生から約3ヶ月後に膳所藩によって作成されたこの修復願いの絵図には、天守や櫓が傾いたなど、被害状況がとても細かく描かれています。上部には、修復案の図面もついています。

野洲地域では、將軍上洛の際の宿泊所として利用されていた永原御殿の櫓が二つゆり落とされて破損したそうです。東日本大震災の場合も約1000年前には同程度の地震があったことがわかっていたわけ、歴史学的に自然災害を探れば、ある程度のことを想定することができます。

——滋賀県の場合も大規模な地震が発生することを覚悟した方がよさそうですね。続いては、これまで避けては通れない洪水関係の記録を紹介していただけますか。

その2 寛文の大地震—湖西で土砂崩れ、膳所城にも被害—

江戸時代初期、寛文2年（1662）の近江・若狭地震については、被害の状況を描いた絵図「表紙」などが残されています。この地震は、若狭湾沿岸の日向断層による地震と琵琶湖西岸の花折断層北部による地震の二つの地震が連動して起こり、近畿地方北部に大きな被害を与えたものです。大津・彦根などでは少なくとも死者約70名、倒壊家屋約3600軒の被害が想定されています。特に葛川谷（大津市）では、「町居崩れ」と呼ばれる大きな土砂崩れが発生しました。この土砂で町居村と榎村が埋

その3 琵琶湖洪水と瀬田川浚え—今も向き合わなければならない問題—

琵琶湖の水が引き起こす水害は、近江の一つの特徴とも言えるものです。これは常に起こっているので、記録を見ていくと、さまざまな知恵と工夫がなされて、現在に

至っているんだなと思わされます。

——琵琶湖から流れ出ている川は瀬田川だけなので、瀬田川に土砂がたまったら流れが悪くなると洪水が起るという話ですね。

そうです。排水が追いつかないから、湖岸周辺が水没してしまう。そのために瀬田川の川^{かわ}凌^{りやう}えをすることに力を注いできたのが近江の歴史です。少し話が先に話が飛んでしましますが、雨がロープのようだったと記録されている明治29年(1896)9月に発生した大洪水の時³と同じ量の水が琵琶湖に流入したら、やっぱり湖の水はあふれるそうです。い^{あふれ}から洗堰^{せんえん}が整備されたといっても、

決して水害が完全に解消したわけではありません。

——湖岸堤ができてダメなのですか。

2mぐらいあふれるそうです。現時点では、人間の技術は自然に勝てないようです。ちなみに琵琶湖洪水というと、雨が降って、琵琶湖からあふれた水がザアッと流れてくる光景をイメージしがちですが、一定のプロセスがあります。

大雨が降ると、まず低地に水がたまって、冠水^{かんすい}が始まります。次に、その水を排水す

ると、川が増水して、堤防からあふれた水が再び集落を襲います。琵琶湖の水が押し寄せてくるのは、その後です。

一度だけでなく、二重、三重の被害になるわけです。川の水位が下がったら、今度は逆に琵琶湖からあふれてくるという、非常に恐ろしい水害なのです。

——当時は、洗堰が整備されていないわけですから、そうなりますね。明治29年の洪水では非常に長い間水没していたのですか。

237日間と記録されています。ただ、



それは全域ではなく、ある測定した地点のことだろうと思うのですが。数ヶ月間、水が引かなかったのは確かです。排水が追いつかないのです。琵琶湖の水位は9月中旬にピークを迎え、常水位に戻ったのは11月末であったといわれています。

例えば、彦根では市内の80%が沈みしました。天津の中心部は全域が浸水したといわれています。当時の石山鳥居川の量水標の常水位は約83cmでしたが、9月11日には3.1m増の約4.1mの水位を記録しています。湖岸の唐崎の松も、わずかに頭部をみせるだけになったそうです。

浸水区域を表した地図によると、旧野洲郡は、ほぼ浸水しています。この時は、野洲川も決壊しているわけです。琵琶湖沿岸地域の吉川という集落の吉川治良左衛門家の場合、家族全員が蔵の2階で生活したと伝えられています。

これ4は琵琶湖博物館所蔵の写真で、吉川の住民を写したのですが、けっこう皆さんニコッと笑っています。人間は大変な目にあっても、カメラを向けられると笑っちゃうんですね(苦笑)。足下にあるのは、みんな田舟なんですよ。

こちらの写真5は、灯籠の形をしています。ですが、洪水時の水位を刻んだ石標です。この石標には、江戸時代の万延元年(1860)と慶応4年(1868)、明治18年(1885)にも発生した洪水の水位が記録されており、とても貴重なものです。当時の吉川家当主で、この洪水石標を設置した吉川治良左衛門さんは、瀬田川の流量を調節するために明治38年(1905)に完成した南郷洗堰の建設工事を推進したお一人です。

水害の恐ろしさを実感していた人だったのです。



↑野洲郡中洲村大字吉川野洲川堤塘ノ避難者
(彦根地方気象台撮影・滋賀県立琵琶湖博物館提供)



←琵琶湖洪水石標 吉川家庭園内 (寿福滋氏撮影)

↓吉川家旧蔵に残された洪水時の水痕 (消滅)



こちらの写真6は、今は取り壊されましたが、吉川家の蔵の内部です。琵琶湖の水が押しよせた高さまでの壁の土はなくなっていて、竹組みがむき出しになっています。実際に計ってみても、その高さが洪水時の水位と一致したそうです。

例えば、湖岸近くの集落では家を建てる時、琵琶湖に向いている側面には、できるだけ窓をつくらないようにしていたそうです。それでも沈んでしまうわけですが、そういう知恵が生活のなかに息づいていたということですね。

江戸時代にさかのぼって、その辺のお話をお願いしますか。

近江の人は瀬田川浚えすることに熱心でした。

今回展示する「瀬田川自普請組合村絵図」は、そうした当時の状況をよく示す絵図の一つで、「自普請」というのは自分たちで普請、工事するという意味です。幕府が直接事業を行わない場合は、湖岸の村々がお金を出し合って川浚えをせざるをえませ

でした。ただし、あまり被害にあわない高地に位置する村は参加しておらず、同じ湖岸の村でも温度差がありました。

幕府がなかなか許可しなかったのは、水の流れがよくなると今度は淀などの下流域の人々が困るので、反対運動が起きたからです。こうした上流と下流の駆け引きはいまでも同じらしいです。当たり前ですが、洗堰から水を流せば流すほど、今度は下流域の人々が危なくなる。ダムが整備され、水量もある程度調整できるようになりましたが、そういった問題は江戸時代と変わっていません。

解決法はないのでしょうか。

琵琶湖河川事務所にお聞きしたところでは、瀬田川の流量を増やすように改修する、宇治川流域の天ヶ瀬ダムのところでできるだけ水をためられるようにする。この二つの処置で調整しながら排水するしかないようです。

水に関しては、近江の人々が常に向き合

ですね。江戸時代に『農稼業事』という農書を著した、近江の湖東の児島如水という人物がいます。この人などは、冠水することを前提に、稲の栽培方法を記しています。

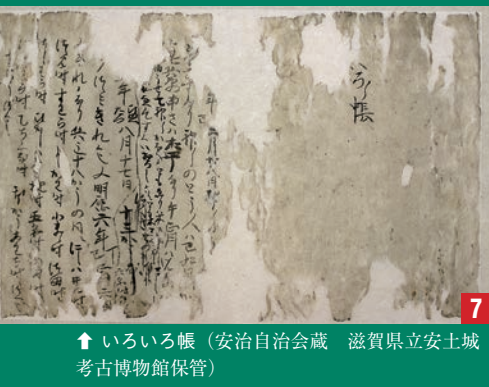
その4 暴れ川 野洲川 10年に一度の被害の中で

続いては、県内最大の河川、野洲川の水害を紹介しています。さきほども言いましたように、野洲川は10年に1回の割合で氾濫する「暴れ川」だといわれてきました。北流と南流の二つに分かれていた下流部を一本化する改修が昭和56年（1981）に完了し、頻発した水害には終止符が打れたとされていたのですが、去年（2013年）の9月中旬に襲来した台風18号の時は危なかったです。

天津市の大戸川や高島市の鴨川の水があふれてかなりの浸水被害が出た時ですね。

そうですね。野洲川は一応氾濫することなく収まりましたが、堤防から濁流が溢れ出る恐れがありました。

そうした野洲川の水害を記録したものとして注目できる資料が、室町時代の明応年間（1492～1501）の「いろいろ帳」7という野洲市安治自治会の共有文書です。



↑ いろいろ帳（安治自治会蔵 滋賀県立安土城考古博物館保管）



↑ 川田村さこね畑絵図（個人蔵）



↑ 旧野洲川北流石垣堤防（吉川周男氏撮影・提供）

つまり、何年かに一度は沈むことが当たり前なんです。自然災害が起こることということを想定して暮らしていたことがわかります。

名前がおもしろいですね。

本当にいろいろな書いてあって、メモ書きしたような文書です。難解な部分が多いのですが、そこに、「つつみきれ（堤切れ）」つまり堤防が決壊したことが記されています。

この時代には確実に、野洲川に堤防がつくられていたわけです。堤防が築かれるということは、この頃には野洲川の流路が決まっていたと考えることができます。また、川ですから、複数の集落をまたがって堤防をつくる必要がありますよね。水野章二さん（滋賀県立大学教授）は、村落連合が堤防を造り上げていく原動力になったのではないかと考えておられます。

なるほど、運命共同体という意識が生まれますね。

次は江戸時代の「さこね畑絵図」8ですが、「さこね」というのは守山市川田町の

小字名です。野洲川の中にあつた中洲を畑地として活用していたことがわかります。

この辺りは野洲川が南北流に分かれるところですね。そのため、洪水が引き起こるリスクが高い場所です。さきほども言ったように、水害の発生を前提にした生活体系が築かれていたわけです。

こういう土地ほど肥沃だったりするのでも、今もあちこちの川の河川敷などに畑がありますよね。湖北だと桑畑にしたとか。

この「さこね」も、明治以降には桑畑になったそうです。

絵図が描かれたのは、年貢を納める必要があったからですね。

細かく区画して色分けされていますが、それぞれ領主が違います。近江ではよくあったことですが、複数の領主によって支配された「相給地」なのです。堤防工事もそれぞれの領地の役人が寄り合って決めるための堤普請所というのがありました。

この古い写真9にある石積みは、ずっと奥までつづいていますね。

野洲市吉川にある矢放神社の前に築かれていたもので、明治26年（1893）から2年がかりで築かれました。ご覧のとおり、かなり立派なものです。野洲川放水路にともなう整備事業によって、今は農地となっています。

放水路の完成とともに失われたものとしては、去年の企画展「野洲川の歴史と文化」で紹介した吉川の野洲川北流に仕掛けられた築もありですね。500年以上前から存在していたことがわかっていて、江戸時代にはここで捕獲された

魚が兵主神社を通じて朝廷に献上されていた。築を設ける権利は「築衆」と呼ばれる人々だけが持っていて、北流が廃川に

なっているのは消滅したわけですが、「築衆」という組織は存続していて、現在も寄り合いをなさっています。

その5

昭和28年の野洲川大洪水

語り継ぎたい当時の経験

そして最後に紹介しているのは、昭和28年（1953）の大洪水です。この年に襲来した台風13号にともなう豪雨で野洲川北流の右岸堤防が195mにわたって決壊、死者3名、重傷170名、流出・半壊家屋1713戸、田畑の流出・埋没地約5000haという大被害を出しました。

当時の状況を伝えるこれらの写真は、辻川信義さんという方が、その惨状を後世に伝えたいという思いから、各方面から収集なさったコレクションの一部です。

これは上空からです。『2ページ右』

この白い部分が砂で、川から集落に向かって濁流が流れ込んでいます。この土砂と水が野洲の井口集落に流れ込んだわけです。他の写真は、地上で撮影された井口と須原の状態です。

次が決壊現場の写真10です。恐ろしいで

すね。すぐに、保安隊（現、自衛隊）が派遣されてブルドーザーで堤防をつくりました。11。先日、当時を知る方にお話をうかがったのですが、その方はこの時にブルドーザーを初めて見たそうです。

他にもお聞きした話では、昔は堤防が切れそうになったら、まず牛を逃がしたそうです。それだけ自分たちの生活に密接な生き物だったのです。高台にある神社やお寺に、とりあえず牛をみんな持つてくる。石段を上がったら20、30頭の牛がひしめいていてびっくりなさったとか。

—そういうお話は現実感がありますね。お話を聞いた方は、おいくつなんですか。

先日うかがった方は88歳。当時はお子さんだった方でも、皆さん70〜60代ですね。

ある方は、それほどの災害になるとは思っておらず、田舟をちゃんとつないでい

なかった。洪水が落ち着いたらまず田舟を回収しにいき、近くの木に縛りつけてまわったそうです。

役場の対策としては、桶に飲み水を入れて、田舟で運んで回ったそうです。濁水で井戸などもやられているわけですから。

野洲市野田に野田沼内湖という内湖がありました。戦時中から戦後にかけて干拓され、昭和28年当時は農地になっていたのですが、やはり低湿地なので、水が流れ込んで一面が再び湖のようになっていました。9月でしたから稲刈りがまだ行われていなかった地域もあり、食糧の面でも被害は大きかったのではないかと思います。11月に入っても水位が上昇したままで、田舟に乗って稲を刈り取っている写真もあります。泥水に浸かっていたので、脱穀した時もトラックの排気ガスのような煙が舞っていたといいます。

—干拓された内湖には住宅地になっている所もありますから、その話は怖いんですね。

このような野洲川の洪水に関する聞き取りをもっと記録しておきたいと思っています。ちよつと暗い話を続けましたが、滋賀県

は、水害がくり返し発生してきた地域です。近江の人々には水が襲ってきたら、それに対応した生活の知恵をつくり出していたのではないかと思います。そういう部分も、近江の文化、特徴の一つとしてまとめることができればよいと思います。

—本日は準備中のお時間をさいいただき、ありがとうございました。

(2014・9・11)



10



11

↑ (上) 野洲川北流の決壊現場 (下) 決壊場所の築堤 (ともに辻川信義氏提供)

↓ 現在 (廃川後) の同じ場所 (2013年9月撮影)



佐川美術館所蔵 国宝・梵鐘

佐川美術館学芸員
井上英明

平山郁夫や佐藤忠良、樂吉左衛門といった現代作家の作品を収蔵公開している佐川美術館ですが、収蔵する作品の中で、唯一国宝に指定されている梵鐘があるのをご存知でしょうか。滋賀県内に所在する梵鐘の中でも、国宝に指定されているのは、佐川美術館のもので、今回その梵鐘を約3年ぶりに一般公開します。

そもそも、梵鐘とは仏教寺院で用いる釣鐘（つりかね）のことで、時刻を告げたり、諸行事の合図に用いたりする仏教法具の一つになります。私たちにとっては、12月31日に撞かれる除夜の鐘が最も馴染み深いでしょう。また、梵鐘にはそれ自体にまつわる伝説や伝承も多く、ここ滋賀県でも近江八景の一つ「三井の晩鐘」として知られる三井寺（園城寺）の梵鐘や、同寺にある武蔵坊弁慶によって比叡山に引き摺り上げられたとされる梵鐘（「弁慶の引き摺り鐘」）などが好例と言えます。

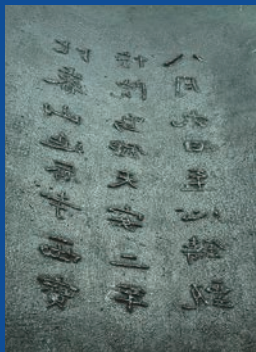
佐川美術館に収蔵されている梵鐘は、もともと比叡山延暦寺の西塔地区にあった宝幢院（現在は廃絶）の鐘として製造されたもので、天安2年（858）に造られたことがわかる銘文が鐘身内に見られます。紀年銘が入った梵鐘としては、国内で6番目に古いものとなり、銘文は「比睿山延暦寺西寶 幢院鳴鐘天安二年 八月九日至心鑄甄」の3行24文字が左文字（逆文字）で鑄たためられています。この左文字になった理由は、中型（鑄物を作る時に空洞にあたる部分の鑄型）に正字で陰刻し



のために生じた技術的な誤算とも、梵鐘を外側正面から拝したときに、正しく透かし読めるようにあらわされているとも言われています。「至心鑄甄」という文字を「心をこめて鐘を見る」と解釈すれば、技術的な誤算というよりも、意図的に文字を逆さに刻んだと考える方が自然ではないでしょうか。

いずれにしても格調高い洗練された書体、簡潔な文章は名だたる人物の手によるものと推察され、宝幢院が嘉祥年間（848〜850）に創建されていることを鑑みれば、本鐘鑄造の発願者を創建に関った初代院主恵亮を含めたその周辺に求めることも可能でしょう。

改めて梵鐘を見ていくと、口径に比べて丈が著しく高く、肩から下が口縁部にかけてほとんど直線で鐸状（裾開きの円筒状）をなした極めて狭長な形姿となり、装飾性を抑えた簡潔な造りの竜頭、簡素な8弁の蓮華形となる撞座など、他に類を見ないスタイリッシュな形をしています。



●本鐘は、当館で2015年1月18日(日)まで、平山郁夫が描いた世界遺産シリーズとともに公開していますので、ぜひこの機会にご覧ください。「11ページ参照」



ての風景や人々の写真をパネルにし、あわせて昔の道具類を紹介します。

休館日：月・火曜日 入館料：無料

お問い合わせ先：TEL 0748 (86) 7551

日本中世の村落社会 —菅浦文書が語る民衆の歴史—

11月1日(土)～11月30日(日)

長浜市長浜城歴史博物館

国の重要文化的景観に選定される見通しとなった長浜市西浅井町菅浦。惣村(中世の自治組織)の典型として名高いその歴史を、地域に残された古文書「菅浦文書」から読み解きます。



(撮影・寿福滋氏)

入館料：大人400円、小中学生200円

休館日：期間中無休

■展示説明会

「湖東焼の盛衰と美」

11月1日(土) 午後1時30分～

説明：長浜城歴史博物館長 太田浩司

会場：長浜城歴史博物館研修室・2階展示室

■記念講演会

「菅浦文書研究の到達点」

11月29日(土) 午後1時30分～

講師：青柳周一氏(滋賀大経済学部教授)

会場：勤労福祉会館 臨湖(長浜市港町4-9)

受講料：500円

お問い合わせ先：TEL 0749 (63) 4611

湖東焼鑑賞のススメ —地域で愛される焼物—

11月1日(土)～12月21日(日)

愛荘町立歴史文化博物館

江戸時代後期、彦根城下の商人によって開窯された湖東焼は、時の藩主・井伊直亮によって召し上げとなり、直弼の時代に最盛期を迎え、数多くの逸品を残しました。現在でも地元の方々に愛される湖東焼の数々を紹介します。

発掘された水口岡山城跡 2014

開催中～12月24日(水)

甲賀市水口歴史民俗資料館

豊臣秀吉の命により築かれた水口岡山城跡。今回の展示では平成25年度第2次発掘調査で出土した瓦18点を展示するほか、調査の際に撮影した写真を掲示し、その過程を紹介します。

入館料：大人150円 小中学生80円

休館日：木・金曜日

お問い合わせ先：TEL 0748 (62) 7141

■水口岡山城跡 城郭歴史フォーラム

水口岡山城と豊臣政権・近江の山城

11月16日(日) 午後1時30分～4時30分

会場：甲賀市碧水ホール

豊臣秀次が城主となった八幡山城、秀次付の老となった堀尾吉晴の佐和山城、中村一氏の水口岡山城。これら3つの山城の様相を比較することで、豊臣政権下の城のあり方から水口岡山城の歴史的位置づけを明らかにします。

コーディネーター：中井 均氏(滋賀県立大学)

参加費：無料(予約不要)

※同日午前11時～午後3時は碧水ホール前広場に水口岡山城バルーン模擬天守が登場します。小学3年生以下のお子様は中に入って遊ぶことができます。

お問い合わせ先：TEL 0748 (86) 8026

甲賀市教育委員会事務局歴史文化財課

まちの写真屋さん

開催中～12月21日(日)

甲賀市甲南ふれあいの館

甲南町深川市場で営まれていた写真店、「中西写真工芸社」に残されていた、かつ



近江の自然災害

—地震と水害の歴史—

開催中～11月24日(祝)

野洲市歴史民俗博物館(銅鐸博物館)



野洲市八夫で出土した地震による噴礫を示す地層

近江における自然災害、地震と水害の歴史を中心に、自然の脅威と向き合ってきた近江の人々の歴史や暮らしを紹介します。

入館料：大人200円、高大学生150円、

小中学生100円

休館日：月曜日(月曜が祝日の場合は開館)、

10月14日(火)、11月4日(火)

■記念講演

第1回「地震考古学と近江の遺跡」

10月26日(日) 午後2時～4時

講師：濱 修氏(滋賀県文化財保護協会)

第2回「中世の災害と近江」

11月3日(祝) 午後2時～4時

講師：水野章二氏(滋賀県立大学)

定員：120名 参加費：要入館料(予約不要)

お問い合わせ先：TEL 077 (587) 4410

近江商人を育てた寺子屋

～立身出世は読み書きそろばんから～

開催中～12月14日(日)

東近江市近江商人博物館

神崎郡川並村(現東近江市五個荘川並町)にあった寺子屋の調査成果を中心に、近江商人立身出世の原点となった寺子屋教育を紹介します。

入館料：大人200円、小中学生100円

休館日：月曜日(祝日の場合は開館)、祝日の翌日

■記念講演

「近江商人を育てた寺子屋

五個荘川並 川島俊蔵について」

11月1日(土) 午後1時30分～3時(予定)

講師：中野正堂氏(東近江市教育研究所所長)

会場：てんびんの里文化学習センター 2階 AVルーム

定員：40名 参加費：無料(要予約)

お問い合わせ先：TEL 0748 (48) 7101



がむしゃら人生

戦争のない平和な社会を願って

山田利治 著

A5判上製本 総280頁 非売品

問合先 東近江市尻無町896 (著者)

終戦を目前に父が戦病死、滋賀県遺族会青年部で南方戦線での遺骨収集などに精力的に関わり、県遺族会長も務めた著者が、戦没者とともに歩んだ生涯を綴る。(2014. 8.15刊)

湯次神社と地域村社の歴史

三田村法勝 (北川勝弘) 著

A5判並製本 総88頁 非売品

問合先 長浜市三田町1189 (著者)

長浜市(旧浅井町)の野村・内保・三田・大路4町を氏子とする郷社・湯次神社と、4町の各村社の歴史、建造物、祭事を紹介。中世の館跡が残る三田村氏と浅井氏との関わりについても述べる。(2014.9 刊)



続 区誌 棕川

資料が語る山里の暮らし

澤田純三 著

B5判並製本 総72頁 非売品

問合先 高島市今津町桜町二丁目8-7 (著者)

福井県との境に位置する山村・棕川への歩みを綴る続編。江戸時代の寺院と明治以降の医療問題、戦後の農地買収と再開発の試みなどを記録。(2014. 9.25刊)

かいつぶり

川淵依子先生の三回忌に寄せて

ふじみ手話サークル「かいつぶり」編

B6判並製本 総152頁 非売品

問合先 大津市国分2丁目4-6 宮本ちず子方

父・高橋潔の志をつぎ、手話の普及に努めた川淵依子さんの人柄を偲ばせるさまざまな思い出を集めた追悼文集。遺稿「書き残すべく思ったこと」収録。(2014.11.22刊)



11月

書店で発売予定

滋賀ミュージアムガイド

滋賀県博物館協議会 編

A5変形並製 総160頁
1200円＋税



※カバーデザインは変更される場合があります。

滋賀県博物館協議会に加盟する博物館・美術館70施設を10の力テゴリーに分けて紹介。基本データ、学芸員のイチオシ、ミュージアムグッズなど掲載。

湖東焼 赤絵金彩唐
子図急須 鳴鳳絵付
(江戸時代 個人蔵)



入館料：大人300円、小中学生150円

休館日：月・火曜日(11月1日～12月7日は無休)

無料入館日(関西文化の日):11月22日(土)～24日(月・祝)

■ギャラリートーク

「湖東焼の盛衰と美」

11月30日(日) 午後1時30分～3時

講師：谷口 徹 氏(彦根市彦根城世界遺産登録推進室)

参加費：無料(要入館券)

■ギャラリートーク&鑑定

「湖東焼の鑑賞と蒐集奇譚」

12月7日(日) 午後1時30分～3時

講師：杉岡茂郎 氏(たねや美術館)

参加費：無料(要入館券)

お問い合わせ先：TEL 0749 (37) 4500

平山郁夫 世界遺産シリーズⅡ 比叡山と国宝・梵鐘

開催中～2015年1月18日(日)

佐川美術館

平山郁夫氏が2度にわたる比叡山延暦寺のスケッチ取材をもとに描いた20点の素描作品と、四曲一隻の大作《木の間の釈迦堂 比叡山延暦寺》を中心に、世界遺産に登録された古都・京都、奈良の文化財が描かれた作品を紹介。また、比叡山ゆかりの国宝・梵鐘を3年ぶりに公開します。

休館日：月曜日(祝日の場合は翌日)、11月17～19日

入館料：一般1000円、高大生600円、中学生以下

無料(ただし保護者の同伴が必要)

お問い合わせ先：TEL 077 (585) 7800





近江商人ってな～に？

子どものための近江商人図録

東近江市近江商人博物館 編
B5判並製本 総48頁 800円＋税

近江商人が生まれたのはなぜ？ 近江商人はどんなものを売っていたの？ どんな暮らしをしていたの？ 現代にも通じる経営理念「三方よし」とは？ 多くの写真やイラストを用いてわかりやすく解説。

江戸城を極める

加藤理文 著

173×115mm 並製本 総64頁 800円＋税
好評の「極める」シリーズ第5弾。皇居周辺だけでなく山手線内側の大部分におよぶ広大な外郭を有した「将軍の城」江戸城。その名残を現在の町並みに探すオールカラーのハンディガイド。



甲賀・湖南のむかしばなし

甲賀地域研究会 編

171×180mm 並製本 総48頁 900円＋税

1997年に出版された『甲賀のむかしばなし』の続編。旧甲賀郡（甲賀市と湖南市）に伝わる「夜泣き地蔵」「大岩の天狗さん」「おろく樹」などの昔話20篇と創作童話「望月の駒」を収録。

自費出版年鑑2014

企画／NPO 法人日本自費出版ネットワーク
A5判並製本 総188頁 2000円＋税

第17回日本自費出版文化賞受賞作を紹介し、応募された全書名、全著者名などを掲載。大賞受賞者インタビュー、総評の他、巻末に日本自費出版ネットワーク会員一覧、第18回日本自費出版文化賞の募集要項を付す。



表紙写真 葛川谷絵図（大津市坊村町自治会蔵 大津市歴史博物館保管）
寛文2年（1662）に発生した近江・若狭地震（琵琶湖西岸地震）によって起こった大規模な土砂崩れと、形成された天然ダム跡が描かれている。

編集後記 今年は大きな自然災害が続き、自分たちが暮らしている、あるいは訪れる土地の来歴を知っておく必要があるなど思われます。本誌を編集中の10月10日現在、特別警報級（数十年に一度の大災害が予想される）の台風19号が、明日からの3連休に日本へ上陸すると報じられています。㊦



別冊淡海文庫 22

本土決戦と滋賀

空襲・予科練・比叡山「桜花」基地

水谷孝信 著

B6判並製本 総238頁 1800円＋税

太平洋戦争末期、内陸の滋賀県でも増加した空襲被害、着々と進められていた本土決戦に向けた準備と人間爆弾「桜花」による特攻訓練の記録を掘り起こす。

近江絹糸「人権争議」の真実

朝倉克己 著

四六判並製本 総184頁 1600円＋税

昭和29年6月に起きた近江絹糸労働争議。当時彦根工場で新組合支部長として闘った著者が綴る106日間におよぶ争議の実録。争議に至る原因と過当な労働管理を綴った前著『近江絹糸「人権争議」はなぜ起きたか』の続編。



いにしへ

古の贈り物

日本画家 西久松吉雄の世界

画／西久松吉雄

200×173mm 上製本 総235頁 3500円＋税

日常の風景との出会いの中で発見する非日常的な風景の在り様を象徴的に取り出した杜や古墳のある風景。日本画家西久松吉雄が描く日本の風土とその思想が綴られた作品集。



「協働」は国を越えて 第10回日本パートナーシップ大賞事例集

岸田真代 編著

A5判並製本 総128頁 1400円＋税

企業とNPO法人が協働で地域社会の課題解決を目指して展開する事業を顕彰する日本パートナーシップ大賞の受賞事例を紹介。書名は、海外との事業展開事例が多かったことによる。



Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1
サンライズ出版株式会社 Duet 編集部
TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。

<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先